



戰役下的少女おたい(Otai)之謎

—牡丹社事件之軼事

戦役下の少女おたい(Otai)の謎

—牡丹社事件の逸事

valjuk-mavaliu 大武山原住民文化藝術發展協會 理事長

島 加奈子 翻譯

話說1874年之「牡丹社事件」，係因日本覬覦台灣已久，而又眼看滿清政府腐敗無能，便趁著1871年在台灣南部的高士佛社（現牡丹鄉高士村）所發生的所謂「琉球事件」中遭殺的琉民五十四名，因清政府未予妥善應對處理，日本遂藉此事故，發動了攻台的軍事行動。於1874年派西鄉從道中將擔任征台都督五月，率領五千五百餘名軍隊，登陸射寮港。名為討伐涉事之原住民，實為探查台灣軍情，以利為未來做大規模侵台之行動做準備。

譯 1874年の「牡丹社事件」といえば、日本が台湾を長い間狙っていて、又満清政府の腐敗、無能ぶりを目にし、1871年台湾南部の高士佛部落（現在の牡丹高士村）で発生したいわゆる「琉球事件」において殺害された琉球人54名に対して、清政府が適切な処置をとらなかったため、日本側はこの事件を利用して台湾征服の軍事行動を發動したものである。1874年、西郷従道中將は征台都督を任命され、5月、5500余名の軍を率いて射寮港に上陸した。名目上は原住民の討伐、及び涉外行動だが、実際は台湾の軍事情勢を探查し、将来の大規模な侵台行動に有利になるよう準備をすることだった。

是年7月3日，日本北軍進擊牡丹的尼乃社（本地稱tjaljunay），並佔領牡丹大社。當時日軍在尼乃社，擄捉了一名少女孤兒，年紀約十二歲。據日方說她相當缺乏應對禮儀，給予食物，則大方啃食。經送到西鄉從道的軍營時，從道臨時取名為おたい（otai，即「御台」—表示是台灣姑娘之意）。但其原名為何？日軍無人知曉。當時日軍取出浴衣給予穿著，並行保護。再令由日軍補給官大倉喜八郎於當月送至日本的本革屋町，並被安置住在上田發太郎家裡。另安排保母照顧及家教囑託，使其讀書寫字，接受女子應有之生活教育。迨是年10月底，日清談判成立，日軍接受清政賠償，計五十萬兩銀圓之條件，答應撤兵。おたい就於11月14日再由日本東京出發回台

，24日抵達射寮日本軍營。當時のおたい，既接受了約四個月的日本家教，穿著日式女服，儼然亭亭玉立。在牡丹頭目接引之下，平安地歸回老家——牡丹的尼乃社。

譯 同年7月3日、日本北軍は牡丹の尼乃社（現地名称tjaljunay）を進撃し、牡丹大社を占領した。当時、日本軍は尼乃社にて12歳ぐらいの少女の孤児を一名、捕虜として捕らえた。日本側の話によると、彼女はあるべき礼儀に欠き、食物を与えると大きな口でがつがつ食べたという。西郷従道の軍営に送られるとき、従道は臨時的に「おたい（otai）」と名づけた。（otai即ち御台は台湾の小娘という意味である。但し、この子の元の名前は何だったのか、日本軍は誰も詳細を知らない。当時、日本軍は浴衣を取り出して着せ、保護した。又、日本軍補給官大倉喜八郎より、当月日本の本革屋町へ送り、上田発太郎の家へ安置されるよう命じられた。保母をつけて世話をさせ、家庭教師に囑託し読み書きや女子が受けるべき生活教育を受けさせた。同年10月末、日本と清朝の談判が成立し、日本軍は清政府の賠償金計50万両銀円の条件を受け、撤兵に応じた。おたいは11月14日再び日本の東京を出発し台湾へ戻り、24日射寮の日本軍営に到着した。当時のおたいは約4ヶ月間の日本の家庭教育を受け、日本女性の服装をし、ほっそりとしていた。牡丹の頭目に引かれて無事に故郷牡丹の尼乃社へ到着した。

當おたい少女從日本回台後，經見西鄉従道時曾說：dannasan ohayo（施主您早），以日語來打招呼。並且在紙上寫出：ニホン（Nihon）、トウキョウ（Tokyo）、オタイ（Otai）的片假名文字（即日本，東京，於大）給大兵們看，頓使西鄉十分驚訝。由此可看出，日軍分明以女孩當人質，又加以教化，再令其返社，為教化社民的榜樣，預為未來歸順原住民工作之基礎，實在用心良苦。

譯 おたい少女が日本から台湾へ戻った当時、西郷従道を見て「だんなさんおはよう」と日本語で挨拶し、又、紙に「ニホン（Nihon）」「トウキョウ（Tokyo）」「オタイ（Otai）」のカタカナ文字を書いて兵隊達に見せたことは西郷を大変驚かせた。ここからもわかるように、日本軍は女の子を明らかに人質として扱い、又教化し、再び部落に返したことは部落の住民を教化する良いお手本であり、将来原住民を帰順する仕事の基礎を予見するものともいえ、意義深いものである。

おたい經由部落頭目引回家鄉，因能說些許日語，且穿著文明服飾，善理家事，起初頗受社眾之羨慕讚賞，咸認係頭腦優異者，行走各部落之間，人望十分響亮。但是事實不然，儘管おたい在部落裡如何極力要求父老學習好的生活，竭力仿效日本。而社民卻因視日本為敵，曾經來犯本社，故堅持不予理會。おたい少女的改革心願，未被接受；自認抱負不能實現，移風易俗無望

，深覺力不從心，遂日夜鬱悶，而致困惑，並陷入心靈矛盾的絕境，經日心神不寧，終於病倒，年未及十八歲之荳蔻年華，就此與世長辭，了結短暫一生，誠為部落之憾事。

譯 おたいは社の頭目より率いられ故郷へ戻った当時、日本語を少し話し、文明的な服装をし、家事に長けたため、当初社の住民より憧れと賞賛を受け、社中の誰からも大変賢い子として認められ、各社の間で輝かしいほどの人望があった。但し、事實はそうではなく、おたいが社の中でいかに極力身上の人たちに良い生活方式を学んだり、日本を模倣するよう要求しても、住民達は日本を敵と見なし、以前日本人がこの社を襲っているため、その要求に徹底して耳を傾けなかった。おたい少女が改革したいという気持ちは受け入れられなかった。彼女の抱負が実現できず、風俗を変えたいという望みがなくなった事を自覚し、自分の力が気持ちに沿わない事を深く自覚し、日夜憂鬱になり、悶々とし、困惑、そして心理の矛盾という境地に立たされ、精神が不安定になり、病に倒れた。まだ18歳にも達しない若さでなくなり、この短い一生を終わったのは、社にとっても大変残念な事である。

おたいは何許人？這是一個謎。部落人很少談及，知道おたい的，幾乎找不到。筆者大約在三十餘年前，曾赴現時之牡丹村查訪，但村人只知曾聞有女被日軍被擄去之事，但不知是何許家人。迨至一九九六年間，犬子華恆明做深入探訪，才獲悉是pasedjam家的人。おたい年幼父母雙亡，淪為孤女，其後無人再談其身世，故其名字早已消失在村人的記憶中。後有人說她的名字叫vayaiung（娃亞蘊），但此名後代被禁止取用（依族人習俗，前代祖先若有不幸遭遇，則禁止承取其名，亦不得傳後）。且戶籍上無法查考，故難以十分確定，因而使おたい的名字留給部落後人一個謎。

譯 おたいはいったいどんな人だったのか？これは謎である。社でも余り語られる事はなく、おたいを知っている人はほとんどいない。筆者は約30数年前、現在の牡丹村を訪問調査した事があるが、村人は日本人に捕虜として連れ去られた女性がいるという事は聞いたことがあるが、どこの家の出かわからないと言う。年が過ぎ1996年頃、豚児華恆明が詳しい実地調査に入った際、やっとpasedjam家の出だという事が判明した。おたいは幼年で両親を共に亡くし、孤児となった後、誰もその身の上について語る人はいなく、そのため、彼女の名前は村人の記憶からとっくに消えてしまっていた。後に彼女の名前はvayaiung（娃亞蘊）だと言う人が出てきたが、この名前もその後使われることが禁止された。（族人の風習によると、先代の祖先が不幸に遭ったら、その名前を継承したり後代に伝える事を禁止した）又、戸籍上でも調べる事ができないため、十分に確定する事が困難である。そのため、おたいの名前は社の後の住民に一つの謎を残す事になる。

不論世事如何變遷，時代如何轉化，人類畢竟是「萬物之靈」，從學得之知識技能，改變生

活，卻是一直進行者。一個年幼無知的少女被外國兵捉去，傳授異族生活方式，少女心中，只是單純的為教化民俗，改善生活罷了。但是日軍之動機為何，不談而知，似為未來的統治著想。小姑娘有心改革社民生活，仿習日本，在小小的心靈上，顯示其一片愛心，她這一番美意是值得稱道的，卻被族人視為異類。

譯 世間がどのように変わろうとも、時代がどのように変化しようとも、人類はやはり「万物の霊」であり、学習して獲得した知識や技能から生活を変えるが、それでもまっすぐに進んでいくものである。幼く無知な少女が外国兵に捕らわれ、異族の生活方式を教えられ、少女の心の中では単純な民俗の教化、生活の改善だけだったかもしれない。ただ、日本軍の動機は何だったのか言わずとわかることだが、将来統治するという立場に似た考えだったのだろう。少女が村人の生活を改革し、日本に学びたいという気持ちがあり、小さな心の中で一片の愛情を示した事こと、彼女のこのすばらしい意識は語り継がれるに値する事であるが、族人からは異類と見なされてしまった。

事過境遷，今日原住民的生活環境，不是也經過外來文明之刺激，民俗改善，而成為今日的進步。既然如此，試問有人肯定少女的行為嗎？應是對的吧。

譯 時が過ぎ、環境も変わり、今日の原住民の生活環境も外来文明の刺激を経過して民俗が改善され、今日の進歩を遂げたのではないのでしょうか。もしそうであるなら少女の行為を肯定する人がいますか？恐らく正しいと思います。

1895年甲午之役，清朝敗績，派遣李鴻章為全權大臣赴日與日首相伊藤博文、外相陸奥宗光議和，於馬關訂立重要條款，其中之一是將台灣、澎湖、遼東半島割讓給日本。果不期然，日本如願把台灣佔據了，並統治台灣五十年。如果おたい少女沒死呢，而又如果牡丹社接受了おたい的改革建議呢？筆者認為牡丹社的歷史必然會改觀，而且應是正面的。

譯 1895年の日清戦争で清朝は敗れ、李鴻章を全権大使として日本へ派遣し、日本の首相伊藤博文、外務大臣陸奥宗光と講和し、馬関において重要な条約を締結した。その中に台湾、澎湖、遼東半島を日本に割譲するという項目があった。日本はその結果、願い通りに台湾を占拠し、台湾を50年統治した。もしオタイが亡くなっていなかったら、又もし牡丹社がおたいの改革建議を受け入れていたら、どうなっていたのだろうか？筆者は思うには、これは牡丹社の歴史を必然的に変えるもの、又、良い方向へ変えるものである。